

山名会誌「山名第6号」刊行

全国に散らばる山名姓及び山名氏の歴史に興味をお持ちの方々に組織する歴史研究と親睦の団体、全国山名氏一族会（略称：山名会、会長：山名年浩・京都経済短大学長）では会誌の「山名第6号」を11月末に発行致しました。

同誌は毎号、山名会員から寄せられた、各人各様の山名観や各家に伝わる伝承、史実解釈の見解等、会員相互の意見表明・意見交換の場を基本として編集を行なっています。6号の内容は下記の如くです。

第6号目次

第20回総会写真	(口絵写真)	山名氏編年史の考証	山名年浩
文鶴画「猿尾滝観瀑図」「梅に鶴」等	(口絵写真)	「山名」に関わる調査分析	山名一男
天朝を滅亡の淵から救い出した山名一族	宮田靖国	年々歳々花相似歳々年々人不同	山名義範
壺井八幡宮再建の記	三王紀将	等々	

『山名氏年表』

何れも秀文揃いですが、今回一番の力作は、山名年浩会長の「山名氏編年史の考証」（以下：山名氏年表）と考えております。山名会内では、よく「山名氏八百年」とか言っておりますが、山名氏の祖である山名義範公が、新田家より独立し上州山名郷に自らの祈願所として山名八幡宮を創建したのが1175年頃とすれば、現在迄で約840年ほどの歳月となります。この長い歴史の故、年表形式とは言え文字に置き換えて整理するとなると膨大な頁数を要することとなり、小冊子の枠には収まらなくなります。

今回掲載の山名氏年表では、その前編として、山名氏の源流である清和源氏発祥の850年頃から明德の乱以降の1400年頃までを範囲として掲載しています。

年表の形式としては、史実を時系列に整理しただけでなく、その史実の出展書籍も明記しており、原典を遡り易くしています。また、重要な史実については詳細な解説も記して居ます。

(背面サンプル参照)

手前味噌な話、山名氏の年表では有りますが、山名氏が武家政治と深く関わっていた頃の年表ですので、単に山名氏研究のみならず、清和源氏・日本中世史研究の良き手引きになるのでは？と、厚かましくも考えております。

『明德の乱論』

宮田靖國氏の「天朝を滅亡の淵から救い出した山名一族」もご一読頂く価値が高い文章かと思えます。一般的に「明德の乱」は、将軍・足利義満が山名氏の強大化を嫌って、山名一族の内訌を誘い、追い詰められた山名氏清が挙兵に至ったと言う筋書きで説明されているところですが、見方を変えて今まで余り語れたられて来なかった義満の『皇位篡奪の陰謀』を下地に、「明德の乱」へ至った道程を述べています。是非、山名氏年表を参考にしながら、視点を改めた明德の乱論をお楽しみ頂ければと思います。

その他にも、壺井八幡宮再建にまつわる苦労話や、随筆等掲載いたしておりますので、是非、ご一読ください。

(山名会会誌「山名第6号」、A5サイズ、全72頁、協力金1冊：1000円)

お申し込み：山名会事務局まで (FAX：0796-98-1161)

1351	正平6年正月7日 観応2年	直義7万騎にて、八幡山に陣し、義詮を攻めんとす。尊氏は山名時氏を先鋒として上洛をはかり西宮を経て瀬川(箕面市)に駐留。 尊氏と直義軍とが接触し、赤松範資が尊氏軍の主力となり大渡で戦つ。 尊氏は桃井軍と四條河原で戦つ。山名時氏が直義軍に投じた為、戦況は一変し、尊氏、師直、佐々木道譽は敗れて丹波に逃れる。 尊氏は使者を男山の直義に送り、講和をはかる。 師直、師泰兄弟を上杉能憲が武庫川辺で斬殺。 山名時氏が出雲守護職となる。 尊氏が義詮とともに直義討伐の計画に着手する。 8月1日、直義が新波高経、上杉朝定、山名時氏等を従えて北国に逃走。 幕府は佐々木氏を出雲守護職として認めている。 8月13日以前、幕府は山名時氏の丹波守護職をとりあげ。 尊氏、直義追討の宣言を受ける。 8月18日、直義、鎌倉に下る。 10月8日、幕府は山名時氏の若狭守護職をとりあげる。 直義、薩多山の合戦に敗れる。	『太平記』巻29、『兵庫 県史』巻2 P 99 『兵庫県史』巻2 498 『兵庫県史』巻2 499 『兵庫県史』巻2 498 『兵庫県史』巻2 498 『兵庫県史』巻2 498 『一尊院文書』巻2 1988 『兵庫県史』巻2 499 『一尊院文書』*38 『一尊院文書』*39 『一尊院文書』*40 『神家譜』*40
1352	正平7年正月6日 観応3年	直義の急死。(毒殺されたとの風聞があった。) 北畠顕能等、不意に義詮を討ち、これを破る。義詮、近江四十九院へ逃る。 閏2月28日、新田義興、義宗、義治の大軍、尊氏の軍勢と武蔵野の小手差原で対陣す。新田軍が敗れて、敗走す。 3月9日、義詮、近江の四十九院を脱し、京都に向つ。 3月15日、北畠顕能等、石清水八幡宮へ退く。 3月27日、義詮の軍勢、南朝方と荒坂山にて戦つ。 4月5日、後山名師氏(師義とも言つ)が出雲、因幡、伯耆の勢を率いて上洛。財園院に陣をとる。	『太平記』巻30 『太平記』巻30 *41 『太平記』巻31 *42 『大阪府史』巻3 1744 『太平記』巻31

1353	正平8年5月7日 文和2年	9月27日、和田、楠等の軍勢は八幡山へ上り、土岐、佐々木、山名、赤松等の軍勢は洞峠へ上る。 8月26日、八幡の軍勢、力尽き、後村上天皇、囲みを衝いて東條に逃れる。 5月11日、山名師氏(師義)、八幡の軍功として、若狭国税所今富庄の知行を佐々木道譽に属して申達せんとすが、道譽の無礼を怒り、伯耆をさして下る。 3月、山名師氏(師義)、父時氏(当時53歳)は足利直義と共に南朝方となり、出雲、伯耆、隠岐、因幡、四力国を征服し、南朝の諸軍と相応じて京都に進撃せんとす。 つまり、時氏は血気盛んな息子たちにつ引張られ幕府と袂を分かつた。このことので丹波守・若狭守を取り上げられる事となつた。 文和と改元。 山名時氏、師氏(師義)、伯耆を立ちて、但馬、丹後の兵を集めて上洛。 南方より、四條大納言隆俊を惣大将として3000余騎上洛。	『太平記』巻31 『太平記』巻31 『太平記』巻32 『太平記』巻32 『家譜』*44 『家譜』*43
------	------------------	--	--

*38、『一尊院文書』観応2年3月25日付で禅林寺衆来迎院領出雲国淀新莊地頭職に対する土屋佐衛門太郎、多胡孫四郎等の濫妨停止を令した直義の御教書が山名時氏に施行され、同4月3日時氏がこれを遵行している。
『武家時代』P 112

*39、『一尊院文書』観応2年8月5日、足利義詮御判御教書によれば出雲国淀新莊地頭職に対する濫妨停止のことが佐々木高氏に令せられている。
『武家時代』P 112

*40、『神護寺文書』観応2年8月13日付、同寺領丹波国吉富本、新岡莊に対する内藤定光の濫妨を停止する旨の足利義詮の御判御教書が仁木頼章に宛てて出されている。

*41、本文中では2月27日となっているが、同書註に2月20日が正しいとある。

*42、本文中では3月11日。註では3月9日。

*43、『太平記』では8月26日であるが、『家譜』では8月28日となっている。

*44、『家譜』では、但馬、出雲、丹後の兵となっている。